下関西高等学校　進路だより

令和６年３月　進路指導部

～国公立後期試験終了！受験生は本当にお疲れ様でした！！～

国公立大学前期試験の合格発表が 10 日で終わり、12 日を中心に後期試験が実施されました。前期試験で合格できなかった受験生にとってはモチベーションを維持していくことを含め、厳しい状況だったと思いますが、その試練を乗り越えることは今後の君たちの人生において大きな成長に繋がる貴重な経験です。また、年々、後期試験の欠席率が高くなっていることからチャンスが大きいカテゴリーだと言えるでしょう。そして、後期の試験科目は小論文や面接を課すものが多く、社会や自分自身と向き合うことが要求されることを含め、総合的な学力が試されていると言えるでしょう。これまでの努力を結集させ、最後まで粘り強く取り組んで欲しいと思います。

では、今回は１月と２月にそれぞれ実施された共通テストと国立難関 10 大学の前期日程の出題内容について予備校が発表した分析を踏まえて報告したいと思います。

1　大学入学共通テストについて

共通テストの出題内容についてですが、教科ごとの詳細は授業などで話があったと思いますが、**全体として共通して言えることは、問題の分量や扱う資料の数が多く、そこから正確に情報を読解する学力や、資料の内容をそれまでに学習してきた内容と関連付けて考え解答を導出する問題が多いことです。**また、知識や情報の活用力を問う共通テストの問題作成方針が３年目ぐらいから定着し、４年目の今年も引き継がれたと思います。その中で、英語のリーディングでは短時間で多くの情報を読み取る速読力が要求されてきましたが、特に今年は本文の総語数が増加し、西高生もこれに苦戦していました。短時間で多くの情報を処理する速読速解力が、これまで以上に求められる出題となりました。リスニングでも、英文の読み上げが１回しかない設問や表やグラフなどを読み込んで素早く正答を導き出す設問など、高い英語による情報処理能力が要求されていました。数学のⅠ・Ａでは共通テストでおなじみの、実社会での設定に対して、数学を適用して解釈する問題や複数の登場人物の会話から、その人物の考えを踏まえて解答する問題などの出題が継続して出題されていましたが、昨年度と比較すると会話文の量が減少した上、設定も簡素だったようです。同じく数学のⅡ・Ｂでは日曜日に天候が晴れとなる確率を題材とした確率分布の問題が出題されていました。国語では実用文の読解やグラフを用いた出題などは見られず、複数文章や授業の会話場面・生徒の学習活動を想定した出題が見られました。昨年までは文章の比較に手間取ったのに対し、今年は読解自体にしっかり時間をとられる出題であったようです。正確な読解や基礎となる知識事項の習得はもちろん重要ですが、共通テストに向けては複数の文章や資料の情報を結びつけて考察するトレーニングをしておく必要があります。なお、国語の共通テストは試験時間が１０分増えて９０分になるとともに「言語活動」を重視した新第３問が追加されます。少し早めから共通テストならではの出題形式や時間配分に慣れるための対策を図ることが必要だと思います。理科は全体の出題傾向は相変わらず実験結果などから論理的に考える力や本質的な理解を問う出題が多かったようです。科目によっては探究活動、実験に関する設問が多く見られ、学校の探究活動で行う実験、考察を意識した出題となっています。地理・歴史では、提示された資料数がさらに増加しており、資料読解力を求める傾向が継続しています。公民では社会で話題となっているものが題材とされました。以上から全ての教科に共通することは、**短時間で多くの資料から適切に情報を読み取り、解答に必要な情報に正しくアクセスし、他の資料や教科書の学習内容と結びつけて考察する力が必要で、「読解力を養成する」「知識を深く理解して応用する」「未知の設定でも知識を正しく活用して論理的に考察する」**という学びの姿勢であり、これが要求されている点に大きな変化はありませんでした。共通テストではセンター試験時代以上に思考力や判断力を問うことが方針として示されています。ただ、**思考力**と一口に言っても、**「グラフの読解」「知識**

（次のページへつづく）

の発展」、「事象の深掘り」など、さまざまなバリエーションが考えられますが、いずれもトレーニングして慣れていかないと時間がかかってしまったり、出題方針に気づけなかったりします。この**「慣れ」**とは、**問題を多く解くことだけでなく、自分で考察した内容を復習することで身につけられるものであることも**理解してください。つまり、取り組んだ問題の量だけが大切なのではなく、1つの問題に対する**取り組む姿勢**も大切で、たとえば**「別解はないか？」など視野を広げて探究する**ことで、様々な状況への対応力や思考力を身につけることができると思います。当然、思考力の養成ばかりに注視して、**基礎知識の習得がおろそかになってはいけません**し、依然として基礎知識の正確な理解がなければ解けない問題は多くありました。つまり、**バランス感覚**をしっかり持って勉学に励むことが大切で、繰り返しますが、知識の正確な理解と定着は変わらず重要であり、何より個別試験では共通テスト以上に基礎知識が必要です。このハイブリッドな学力が要求されている大学入試に立ち向かう為には**とにかく授業を集中し、学んだことを自学自習でしっかり確認し、指導者との対話や添削指導を通して復習し、自分のものにするという地道な学習習慣が必要**となっていることを心に留め置いてください。だから、**授業に集中するためには睡眠などにおいて規則正しい生活習慣を実践することに尽きると思います。**

2 難関大学個別入試の総論（駿台、河合塾、代ゼミの分析を要約＋コメント、一部科目について省略）

＜東京大学＞

英語は例年、「リーディング」「ライティング」「リスニング」のスキルを満遍なく測定しようとする意図が見られ、大問５題で構成されています。設問形式は毎年のように変化があり、過去の多様な形式を踏まえて、さまざまな設問に取り組み、形式の変化に対応できるようにしておく必要がありますが、根本的に要求されている学力に変化はありません。だから、読解では要求された課題を念頭に置いて、一定以上のスピードで英文を読み解き、必要な情報をまとめる練習が有効であり、日本語表現能力を高めることにも十分に取り組む必要があります。英作文では、基本的な知識の正確な運用が求められている点に大きな変化はなく、多様な形式で練習を積み、添削指導を十分に受けることが近道だと思います。また、リスニング対策にも十分に取り組み、基本的な聞き取り能力を養うことに加え、演習を通して情報を整理しながら話の展開をつかむようにしてください。文科の数学は例年と同じく４題構成で昨年、易化した反動で確率の問題などでやや難化したようです。例年、理科との共通問題がセットされていましたが、今年は 1998 年以来 26 年ぶりに理科との共通問題が１題も見られませんでした。一方、理科は６題構成で近年の難化傾向に歯止めがかかったようです。国語は文科が出題数は現代文２題、古文１題、漢文１題、理科が現代文１題、古文１題、漢文１題となっています。古文以外は本文の分量が増加しましたが難易度は易化し、古文は分量が減少しましたが、難化したようです。理科は物理で昨年まで出題されていた空所補充形式や選択式の設問がなくなりましたし、目新しい題材や，複雑な設定の問題もなくなり易化したようです。化学も傾向に大きな変化はなく、易化したようです。生物は傾向や難易に変化は無かったようですが、生物に関する最新のトピックスに関心をもち、生物の内容を扱ったニュースなどにも目を通しておく必要があります。日本史の難易度は昨年並みと分析され、分量、論述数ともに昨年と同じ程度で、大きな変化は見られませんでした。世界史の大問は３題で第１問が問（１）１２ 行と問（２）５行の２題の論述で構成されていたのは驚きました。２題に分かれて出題されたのは 1989 年以来です。第２問は４行が１題、３行が２題、２行が２題で第２問の総行数は 14 行と昨年より３行増えました。第３問は従来通り設問数は 10 でした。地理はこれまでの入試で問われた内容が切り口を変えて出題されている設問や見慣れない資料が多用される傾向は踏襲されていましたが、普段学習していることと関連付けることで十分に解答までたどり着くことができます。いずれにしても**東大の問題は各教科とも十分な基礎学力が身についているか把握するのに適しており、内容も面白く、流石東大と思わせるような良問揃いです。是非、全ての生徒が数多くの東大本試の問題に触れて欲しいと思います。**

＜京都大学＞

英語は大問３題でⅠⅡがともに下線部和訳３問、Ⅲが英文和訳で分量は昨年度より減少しました。

（次のページへつづく）

英作文問題は昨年度が会話文下線部補充問題、２年前が意見論述型、３年前が会話文下線部補充問題、４年前が手紙の形式、５年前が今年と同じく英文に絡めた意見論述型と形式が固定されていないようです。今後も形式が変わる可能性が高いので色々な形式の問題演習を重ねる必要があると思います。数学は文理ともに昨年の反動で難化しました。誘導がない問題が多い点は今年も同じでしたが、高度な解答力を養うためにしっかりと添削指導を受けることが必要です。国語の文系は現代文２題、古文１題でしたが、古文における有名作品からの出題は京大文系の一つの流れなので平安時代の典型的な文章に慣れておく必要があります。また、近世の随筆・歌論からの出題も多いので論理的な文章にもしっかり触れておきましょう。理科では物理は変化が少なかったようですが、化学と生物で難化した模様です。日本史はほとんど変化がなかったようですが、世界史はやや易化したようです。世界史の 300 字論述問題はテーマ性が高い問題が増加しており、設問理解を正確に捉えて書く必要があります。普段から因果関係を踏まえた時間軸と地図を活用した空間軸に力点を置いた学習が進めてください。もちろん、教科書の内容を中心とした学習を心がけてください。京大では、中国史やイスラーム史、古代ギリシア・ローマ史など特定の地域・分野が毎年出題されているので過去問も有効に活用しましょう。地理は大きな変化はなく標準レベルの問題が多かったですが、地形図の問題が頻出なので、きちんと対策をたてておく必要があります。

＜九州大学＞

英語は大問５題で読解問題が 130 点、英作文が 70 点の配点でした。読解問題の分量はやや増加していますが、例年問われていた字数指定の説明問題が出題されませんでした。難易度は昨年並みと分析されています。数学は文系、理系ともに易化と分析されています。文理共通問題が２題出題いましたが、特に文系は例年になく取り組みやすい問題が多かったようです。国語は文学部では今年も現代文１題、古文２題、漢文１題構成で現代文が少し難化したようです。古文２題は難易度に変化は見られず、分量も昨年並みでした。経済・教育学部の国語は現代文が２題で古文１題、漢文１題の構成でしたが、難易度に大きな変化はありませんでした。物理は例年通り大問が３題であり、出題分野は「力学」「電磁気」「波動」でした。最近は波動、熱力学が交互に出題されていましたが、昨年より両方からの出題が続いていますが、難易度に変化はなかったようです。化学は大問５題の出題で文字式を含む煩雑な計算問題が出題され、正答数が示されていない正誤判断問題が５問と多く出題されたことから難化したと分析されています。生物の大問数は例年通り５題でしたが、論述問題が８題から 10 題に総文字数が 610 字から 700 字と増えましたが難易度には影響しなかったようです。一方、日本史は難化したようで、論述問題に関しても８題出題され、総字数が 840 字と大幅に増え、受験生を悩ませたようです。世界史も分量が増え、難化したと分析されています。世界史の問題はミニ東大的な出題構成、内容なので東大志望者は九大の過去問から始めるのも良いと思います。地理は例年、系統から１題、地誌から１題出題されていますが、今年は「洪水と水害」「西アジア・中央アジアの地誌」がテーマでした。いずれも標準レベルで難問はありませんでしたが、論述問題が大半なので日ごろから論述することに慣れておく必要があります。

＜大阪大学＞

外国語学部の英語は英文和訳、読解総合、自由英作文、和文英訳、リスニングの５題構成、外国語学部以外は第Ⅰ問の和文英訳、第Ⅲ問の自由英作文は外国語学部と共通問題、第Ⅱ問読解総合と第Ⅳ問の和文英訳は独自問題となっています。難易度は外国語学部、外国語学部以外ともに変化なしと分析されています。数学は文系が３題、理系は５題構成で文系、理系ともに今年はさらに難化したようです。国語は文学部が現代文２題、古文１題、漢文１題の４題、人間科学部、外国語学部、法学部、経済学部が現代文２題、古文１題の４題構成です。文学部で室町時代の物語が出題されるのは過去十年で初めてでした。ただし、類似文種で説話からの出題がしばしばあるので、さほどめずらしい出典ではないようです。例年、和歌の設問があるようですが、今年は文脈展開をふまえた説明問題でした。物理は大問３題が出題され、分野は［１］力学［２］電磁気［３］熱と原子でした。難易度は変化なしと分析されていますが、化学の難易度は易化と分析されていますが、阪大の化学はバランスのとれた対策に取り組んだ受験生が有利のようです。生物は昨年度に比べると

（次のページへつづく）

難化と分析されています。しかも、当日に廃問となった設問があったり、当日になってからの訂正があったりなど受験生は大変だったようです。日本史は例年通り古代・中世・近世・近代から１題ずつ出題されましたが、文化史も出題されました。世界史は文学部と外国語学部の共通問題が２題、独自問題が１題ですが、文学部はアジア史のみの出題となり、難易度は易化しました。

＜神戸大学＞

英語は長文総合問題３題と２つの設問からなる自由英作文１題の出題で、難易度は昨年並みと分析されています。大問Ⅲが小説文という形式は例年通りでしたが、長文の総ワード数の増加には歯止めがかかったようです。数学の文系は大問３題構成で、難易度は変化なしと分析されています。理系は数学Ⅲの問題が昨年１題、２年前４題、今年３題と大きく変化しており、注意が必要です。国語は海洋政策学部が現代文１題の試験時間 60 分、経営が現代文１題、古文１題の 80 分、他の学部が現代文１題、古文１題、漢文１題の 100 分構成となっています。現代文は例年、部分読解型の問題と本文全体の要旨を踏まえる要約型の問題で構成されており、対策が必要です。物理は 3 題で難易度は昨年の反動で難化、化学は 4 題で昨年難化に対して易化、生物は４題で難化と年度による変動が大きいようなので注意してください。

＜東京工業大学＞

英語の難易度は易化したようで、長文２題の総語数は６年連続で 3000 語を超えており、分量的な負担は大きいです。数学は 180 分 5 題構成ですがこちらもやや易化と分析されています。昨年と比較すると発想力を要求する問題の割合が低下し、点差がつきやすいセットとなったようです。理科は物理 120 分、化学 120 分の合計４時間の長丁場の試験となっていますが、今年は数学、英語とは逆に両方ともやや難化したと分析されています。

＜一橋大学＞

受験生から一橋の英語は出題傾向が安定していないという風評があるようですが、変化しているのは大問の構成で、出題傾向自体の変化は小さいようです。基本的に東大始め難関大学の要求内容にぶれは無いので、大学入試の過去問対策は必要ですが、あまり右往左往せず、とにかく基礎学力重視で対策をしてください。国語は現代文２題、文語文１題で構成されていますが、問題２の文語文は現古融合文、現漢融合文、近代文語文、近世の古文などから出題される可能性が高いようです。数学は 5 題構成でしたが分量、難易度ともに変化は無かったようです。地歴も大きな変化は無いですが、そもそも難易度が高いので対策に時間をかける必要があります。

＜北海道大学＞

英語は例年通り、英文読解問題が２題、英作文問題が１題、会話文要約問題が１題の大問４題の構成でしたが、難易度は今年も易化したようです。数学は文系が大問４題、理系は５題構成ですがこちらも易化したと分析されています。国語は現代文２題、古文１題、漢文１題の４題構成で難易度は昨年並みと分析されています。理科は物理が今年も難化し手ごわかったようですが、化学と生物は易化したようです。北大は今年は全体として易化した個別入試となった印象です。

＜東北大学＞

英語の出題構成は変化がありませんでしたが、難易度は昨年の反動で易化したようです。数学は文系が４題、理系が６題構成でしたが、理系は易化傾向が続いてきましたが、今年は文章量が多く、小問も多く設置されるなど難化したようで、特に後半の対数関数や数列・整数の問題に苦戦した模様です。理科も物理と化学は難化しました。物理では長い問題文、複雑な装置設定、大問後半の思考力を必要とする設問という伝統は変わらなかったようです。

＜名古屋大学＞

英語は読解総合１題、対話文１題、英作文１題で構成や分量に変化はありませんでしたが、難化したようです。数学は文系３題、理系４題の構成でしたが、文系が易化したようです。国語は現代文１題、古文１題、漢文１題ですが全体としてはこちらも易化したようです。理科も化学が易化したようでです。

以上です。紙面の都合で窮屈な分析となりましたが、参考になれば幸いです。　　（文責・松村）